

かかりつけ医・家庭医のための慢性疼痛症線維筋痛症の診断と治療 診療ガイドラインから治療薬まで解りやすく解説

日時：平成23年6月26日（日）10:00～15:00

講師：岡 寛 東京医科大学 八王子医療センター教授 場所：すみだ産業会館

原因がよくわからない、なかなか完治しない…いわゆる「難病」の宣告は本人にとっても周りの者にとっても心にも大きな傷を負わせます。

そこで最近研究が進み保険収載のめどが立ってきた『線維筋痛症』について、その第一人者である東京医科大学八王子医療センター リウマチ性疾患センター部長の岡寛教授を講師に迎え6月26日、東京都墨田区のすみだ産業会館において「慢性疼痛症 線維筋痛症の診断と治療」をテーマに開催いたしました。

線維筋痛症はリウマチ専門医が診るべきである！

原因がよくわからないが体中に痛みを感じる慢性疼痛症、特に線維筋痛症は8,000人の住民アンケートから1.66%が線維筋痛症と診断され、全国民では推定200万人の患者が苦しんでいるとみられます。

男女差は男性が1に対して女性が4.8と圧倒的に多く、発症年齢は40代半ばが中心で働き盛りの女性が会社を辞めざるを得ないという問題が生じております。

また、小児も4.8%と見逃せないほど多く、これらの患者の多くは不登校の問題をはらんでいます。

線維筋痛症は全身の多くの部位が痛くなる病気ですが、病理検査等をおこなっても「異常なし」との結果が出てきます。それは末梢性の疾患ではなく、中枢の機能異常が原因とされているからです。

そのためメンタル系の医師に回されてしまうケースが多くみられますが、線維筋痛症はリウマチ性疾患が混在する合併症が多く、海外では当たり前のようですが、日本でもリウマチ専門医の先生が担当すべきだと岡先生はおっしゃってございました。

痛みを取るだけが医療ではない！

今回のセミナーで最も強く感じたのは、難病と闘っているのは患者だけではないということでした。医師も「どうすれば病気が治るのか、何を患者は望んでいるのか」について日々戦っています。

岡先生は「痛みを取るだけでなく、身体機能の回復や活力や心の健康といったQOLの改善、副作用への対策が大切です」「患者にとって大事なのは痛みを取ることはもちろん、離職した人を職場に戻すこと…これが医療です」とおっしゃっています。



患者のための医療について語る岡先生

線維筋痛症は決して治らない病気ではなく完治される患者も多くいます。後半はガバペン、サインバルタ、トラムセット等の薬の処方について説明していただきました。しかし、治療で重要なことは来院→薬物療法でなく、マイナス感情の是正・疾患の受容・治療に対する前向きな姿勢といったステップを踏んで薬物療法に至るべきだそうです。

次回セミナーは8月14日、銀座の中小企業会館で西野徳之先生により「腹部単純X線写真の読影」をテーマに開催いたします。